

赤十字NEWS 12

Japanese Red Cross Society NEWS

DECEMBER.2023.#1003

12月は
NHK海外
たすけあい
キャンペーン

約1億1000万人もの人々が故郷を追われています。
その数は日本の人口にほぼ匹敵します。

世界人口の



人に1人が
難民・
避難民です



特集 ▶ P.2

今、危機に^{ひん}瀕している
1億人の命をつなぐために。

出典:UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)「Global Trends Report 2022」

日赤による
難民・避難民支援

中東人道危機支援事業
バングラデシュ
南部避難民支援事業
ウクライナ
人道危機支援事業

IFRC*のアピールに応じて
資金援助を行う難民支援
↓
スーダン、
アフガニスタンなど

*国際赤十字・赤新月社連盟

TOPICS

被災地の仲間をサポートしたい!
立ち上がった赤十字奉仕団

救う人を、育む。看護大学の動画が完成

..... P.4-5

連載

国内災害救護 まるわかり辞典

..... P.4

輸血なるほどヒストリー

..... P.5

AREA NEWS

[北海道] 「医師になって患者を救いたい」
熱い思いを抱く、外科手術体験

[栃木] 国際理解と親善を深めるために
北関東3県のJRCが留学生と交流

[富山] これからは“誰でも”体験できる!
大学祭でアマチュア無線をPR

／他 P.6-7

WORLD NEWS

生きる場所や資源も奪う大洋州の気候変動

..... P.8

Present!!

清川メッキ工業
バ塩、トマトバ塩
2本セット

プレゼント!
10名様
詳しくは
P.7をチェック! ▶



特集

今、危機に瀕している 1億人の命をつなぐために。

紛争などから避難している人々は、世界中で1億人以上いると言われています。日赤はこうした人々に対して、「NHK海外たすけあい」への寄付を活用し、支援活動を続けています。今回の特集では、世界中に点在する難民・避難民の中から3つの地域をクローズアップ。今この瞬間も危機的な状況にさらされている人々をレポートします。

今回の特集で紹介する3地域や、日赤が支援する「アフガニスタン人道危機」の避難民、アフリカ地域の難民・避難民のほか、赤十字の人道支援活動は、世界各地で発生する自然災害の被災者支援など、国や地域の区別なく展開しています。



WORD

難民・避難民とは

難民とは「人種、宗教、国籍、政治的意見または特定の社会集団に属するという理由で、自国にいると迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れ、国際的保護を必要とする人々」のことを言います。一方、**避難民**は難民と同様な理由、もしくは紛争などによって、住み慣れた家を追われた人々のことで、難民認定は受けていません。状況が改善されれば、故郷に戻りたいという思いから国内にとどまっている人々や、障害やさまざまな理由で国境を越えた移動が困難になった人々は国内避難民と呼ばれています。

Ukraine ウクライナ避難民



いまだ1000万人近くが避難生活を送る中 2023年6月にはダムの決壊など新たな問題も

ウクライナでは、2022年2月に武力衝突が激化し、現在でも国内避難民が約367万人(IOM*、11月6日時点)、国外への避難民が約624万人(UNHCR、11月7日時点)いると言われています。そして、国内避難民の72%ほどの人が人道支援機関からの現金給付や政府からの支援に頼って生活している状態です(IOM)。

行っています。紛争激化から2度目の冬。昨年は暖冬で避難民からは「神様のおかげ」という言葉が出るくらいだったのですが、今年の冬は寒さが厳しくなるようです。攻撃による電力不足も懸念される中、地域によっては氷点下20度にもなる厳冬の対策は重要課題と言えるでしょう。

日赤はこれまで、資金援助や医療支援を通じてウクライナ赤十字社の活動をサポートしてきました。現在も、現地でニーズの高さが感じられるのが巡回診療です。たとえば、西部のイヴァノ=フランキウスクは山あいの州で、医療にアクセスしにくい環境にあります。そういった地域では、赤十字社による巡回診療が住民の支えとなっています。また、ウクライナ赤十字社は紛争の影響で一人暮らしとなった高齢者などのために、ソーシャルヘルパーを育成して派遣し、在宅ケアも

また、今年の6月にはウクライナ南部の水力発電所のダムが決壊したことにより、洪水で川沿いに敷設されていた地雷が流されて人が立ち入れないエリアができてしまうなど、長期的な影響も懸念される課題にも直面しています。長らく避難生活を送る人々からは、「故郷の農作物が恋しい」「帰りたい」と、郷愁に駆られる言葉も聞かれます。丸2年間、心安らかに過ごすことができない避難民を支えるのは、日本や世界から「彼らを思う気持ち」です。

*国際移住機関



日赤ウクライナ現地代表部
リヴィウ事務所 副代表
ひの よしき
樋野 芳樹 さん

(左)巡回診療のメンバーとミーティングする樋野さん(右から2人目)
(中)赤十字の物資を受け取る子ども
(右)イヴァノ=フランキウスクの巡回診療で健康観察をする医師



©OLIINYK, TETIANA/ICRC

Middle East パレスチナ難民・シリア難民



(左)負傷者を搬送するパレスチナ赤新月社の救急車(右上)アルクツズ病院に避難する人々(右下)懐中電灯で手元を照らして処置を続ける病院職員

イスラエル・ガザの人道危機 国際人道法が守られる世界を願って



日赤中東地域代表部
首席代表
まつなが はじめ
松永 一 さん

2011年にシリアで内戦が勃発したことから膨大な数の難民が発生し、例えばレバノンには、すでにパレスチナ難民など他の難民を抱えていたところに、シリアからの難民約150万人が押し寄せました。また、2014年に激化したイスラエルでの武力衝突により、ガザにいるパレスチナ難民の支援が必要になったことから、日赤はシリアやガザ、そして周辺国において難民とその受け入れを行う地域への支援を2015年から本格的に開始。レバノンでは難民が利用する病院で医療技術の支援を行い、町の診療所や学校の修繕、トイレの設置、手洗い場の整備などを実施してきました。

現在、中東ではイスラエル・ガザの人道危機が発生していますが、これによってまさに数多くの難民が窮地に追い込まれています。日赤が2019年から医療技術支援をおこなってきたパレスチナ赤新月社*(パ赤)のアルクツズ病院も影響を受けました。病院には攻撃予告が届きま

したが、当時院内には数百人の患者だけでなく1万4000人以上の避難者が身を寄せていたため、こうした人々を残しては離れられないと、パ赤は退避の要求を拒否。救急車も攻撃対象になり、パ赤の職員にも犠牲者が出ました。瓦礫に埋もれて亡くなった子供が当直外科医の子供だったことも…。さらに、近くに着弾したことで病院の窓ガラスが飛び散り、破片がベッドにも突き刺さるなどし、遂には、発電用燃料も無くなり全ての診療活動が停止。病院は閉鎖に追い込まれました。

戦時のルールである国際人道法において、民間人や医療機関・医療従事者、人道支援に携わる者は明確に保護の対象となっています。国際人道法の誕生に寄与した赤十字としては、その存在価値をまさに問われる事態が、現在進行していると感じます。(※記事の状況は11月20日時点のもの) *赤新月社はイスラム圏の赤十字社



Bangladesh

バングラデシュ南部避難民

支援は縮小される中、感染症流行や自然災害発生 困難を抱えながらも支え合う避難民たち

2017年8月にミャンマー・ラカイン州で発生した暴力により、隣国バングラデシュに大量の避難民が流出してから6年。人々は、避難民キャンプからの自由な移動も許されず、先行きの見えない避難生活を送っています。世界各地で災害や紛争が続く中、国際社会からの関心が徐々に薄れ、食料支給額は段階的に引き下げられており、今後子どもの栄養不良が大きな問題となることが懸念されます。日赤が運営するキャンプ内の診療所には、キャンプ生活の制約やストレスが要因と思われる生活習慣病を訴える人が多く訪れています。また、狭く劣悪な衛生環境で家族全員が生活するため、皮膚病やデング熱など、感染症のまん延も問題となっています。

難民同士の結束や対応力が発揮される場面が見られることです。今年3月のキャンプ内で発生した大火災では、誰よりも早く避難民ボランティアが現場に駆け付け、避難誘導や負傷者の応急処置を行いました。彼らはボランティアとしてわずかな日当を得ているのですが、生活の糧を得る手段としてのボランティアを超えて、コミュニティを守るという使命感を持って取り組んでいることに感動と感謝を禁じえません。自国では学校の先生や技術者という職を持っていた人も多く、職や自由を奪われながらも、自分の現在の役割に誇りとやりがいを持っています。「避難民」とひとくくりにするのではなく、外からの支援に甘んずることなく、コミュニティと共に困難に立ち向かう一人一人であることを皆さんに知っていただければ幸いです。



©BDRCS

©BDRCS



日赤バングラデシュ現地代表部
首席代表
ふじさき ゆきこ
藤崎 文子 さん

(左)こころのケアの一環で、避難民の子どもたちと絵を描くワークショップを実施(藤崎さんは右から二人目)(中)モンスーンの冠水で避難する女性(右)大火災の現場で避難民の女性を助けるボランティア

Campaign 『NHK海外たすけあいキャンペーン』は12月25日まで!

日赤とNHKが毎年12月に実施している募金キャンペーンです。集められた寄付は、紛争や災害などで苦しむ世界の人々を支えるため、赤十字のネットワークを通して活用されています。誰一人取り残さない活動を続けていくために、皆さまのご協力をよろしくお願ひします。



詳しくは
コチラ



WORLDWIDE SPECIALS



T O P I C S



1 TOPICS

被災地の仲間をサポートしたい! **立ち上がった赤十字奉仕団**

毎年12月5日は「国際ボランティアデー」。ボランティアを称賛し、より多くの人に活動への参加を促すために国連が定めた記念日です。今回は、日赤の奉仕団が、今年8月の台風7号で被害を受けた鳥取市佐治町^{さじちょう}で、地域の人々を支えた活動をレポートします。



鳥取県では、水害により一部の橋や道路の路肩が崩落、断水や停電も発生した

今年8月15日、中国・近畿地方を縦断した台風7号により、記録的な大雨の被害を受けた鳥取市佐治町。川が氾濫し、橋や道路が崩落したほか、一部の地域では断水し、山間の町は孤立した状態となりました。電話が不通になり、行政機関と連絡がつきにくくなる中で、動き始めたのが地元の佐治町赤十字奉仕団です。まず、コミュニティーセンターの備蓄を用いて炊き出しを行い、高齢で一人暮らしも多い地域において、避難している住民だけでなく1軒ずつ住宅を回り、安全の確認と安心を届けるための支援活動を実施しました。しかし、**佐治町では断水状態が続き、炊き出しを継続することは困難な状況に**。さらにもう一つ、佐治町の奉仕団を悩ませたのが、毎週火曜に実施していた独居高齢者^{もちがせちやう}などへの手作り弁当の配布です。そのときのことを、鳥取市内で隣接する用瀬町赤十字奉仕団の入江真知子委員長はこう話します。

「顔なじみのお年寄りの皆さんが待っているのに弁当が作れない…、と佐治町の奉仕団員が落胆している。それなら私たちが支援しよう、と用瀬町のメンバーに声を掛けたら、みんな二つ返事でぜひ手伝いたい!と。断水して料理ができず、ちゃんとした食事ができていないだろうから、バランスの良い食事を届けようとお弁当を作りました。集まったのは12人。台風が過ぎた後は気温が35度を超える暑さで、鮭の塩焼き、卵焼き、野菜の煮浸しなど、傷みにくいメニューにしました。今回の支援で、よかった、と感じるのは、私たちが届けた50食を、地域をよく知る佐治町の奉仕団員が配ったこと。どうしてる?大丈夫?と声掛けしながら手渡し、話す機会にもなるので、お年寄りにはとても安心感があったと思います。**いざというときに、町をまたいで協力して支援活動ができるのは赤十字奉仕団の強みですね**」。

災害で佐治町への道路が封鎖され、山道を迂回しながら、なんとか届けた50食のお弁当。支えたい、助けたい気持ち^{もち}が形になったボランティア活動は、被災地のお年寄りだけでなく、奉仕団仲間の心も満たしたようです。



用瀬町の奉仕団が50食のお弁当を作り、届けた

そのとき、日赤はどう動く!?

国内災害救護 まるわかり辞典

日赤の救護活動についてさまざまな角度から紹介するコーナー。

今回は**【安全な活動のための原子力災害対応】**です。

東日本大震災において、日赤は発災直後に全国の赤十字病院から救護班を派遣し、救護活動を展開しました。しかし、福島県内で救護活動を開始した救護班は、福島第一原子力発電所での爆発事故発生により、一時、救護活動を継続することができない状態となりました。当時、日赤として原子力災害に対応するための資機材やノウハウを有していなかったために、一部地域での活動を断念せざるを得なかったのです。救護のニーズがあるにもかかわらず、被災地から撤退することとなり、日赤にとって忘れることのできない経験となりました。日赤はこの経験を踏まえ、原子力

災害に対応するために、**個人線量計などの資機材を全国の支部に整備**するとともに、「原子力災害拠点病院」・「原子力災害医療協力病院」に指定されている各地の赤十字病院の医師と放射線技師を**原子力災害医療アドバイザー***に任命することで、原子力災害時における被災地支部災对本部の支援体制を強化しました。また、原子力災害における救護活動のガイドラインやマニュアルを策定し、日赤の行動指針を明確に定め、その指針に従い、現在においては、**原子力災害対応研修を毎年2回実施**するなど、救護班が放射線環境下で安全かつ安心して救護活動などに従事できるよう体制の強化に努めています。

*原子力災害医療アドバイザーは、全国の支部を6つに分けたブロック全てに配置されています。



放射線の線量を測定する機器「線量計」。日赤の救護班要員は、これらの資機材の正しい使用方法も研修で学びます。

救う人を、育む。看護大学の動画が完成

私が赤十字の看護師を目指したワケ…。動画『拝啓 あの時の私。』の見どころを紹介。

明治時代、西南戦争で傷ついた兵士を敵味方なく救護するために誕生した日本赤十字社。西南戦争における救護員集めに苦勞し、救護活動の難しさを痛感した日赤創設者たちは、女性救護員(看護婦)の重要性を唱え、その育成の場として1886(明治19)年に博愛社病院(翌年、日本赤十字社病院に改称)を開設。1890(明治23)年4月から看護師の養成を開始しました。130余年の歴史を経て、この養成の場が現在の日本赤十字看護大学となっています。

このたび、日本赤十字社の看護大学をPRする動画『拝啓 あの時の私。』が完成しました。動画は、赤十字の看護大学の卒業生が、昔の自分に向けて手紙をしたためつつ、災害時に日赤の看護師に救われた経験をきっかけに自分も看護師を目指したことや、その後に赤十字の看護大学に入学した様子が回想され、今、日赤の病院に勤

務する看護師として、今度は自らが災害現場で人々を救う立場になったというストーリーが描かれていきます。この動画を通し、看護師として災害救護の現場で活動することを目指している学生に、そのやりがいや、赤十字の看護師育成の過程にあるさまざまな魅力を感じてもらおうことが目的となっています。

日赤の看護大学は、北海道、秋田、東京(さいたま含む)、愛知、広島、福岡の6カ所にあり、赤十字の「人間のいのちと健康、尊厳を守る」という理念に基づいて、国内外で多岐にわたり活躍する看護職を育成しています。同大学では、赤十字の医療従事者による指導のほか、災害救護の最前線を知るプロフェッショナルから実践的な知識や技術を学び、多くの人を救える人材を育む環境が整っています。同大学のメッセージが込められた動画は、右下の二次元コードから視聴できます。

動画のストーリー



誓いのキャンドルを手にする、看護学生時代の回想シーン



看護師となり、医療救護班のピブスを手に思いを巡らせる



被災地でかつての自分と重なる少女に声を掛ける

1回の出願で複数の大学に併願ができる!「6看護大学連携併願選抜」

- 1回分の入学検定料*で、全国にある日赤の看護大学(6看護大学7学部)に同時併願が可能な「6看護大学連携併願選抜」が始まります。**令和6年度の出願期間は、令和6年2月3日(土)から2月19日(月)まで。**詳しい出願や入試情報は、
- 右の二次元コードかWEBサイトからご覧ください。誰かを支えたい、その夢をカタチにする看護大学の扉を、ぜひたたいてください。
- *入学検定料(2万円)の他に別途事務手数料(千円)が必要です。

詳しくはこちら



動画の視聴はこちらから

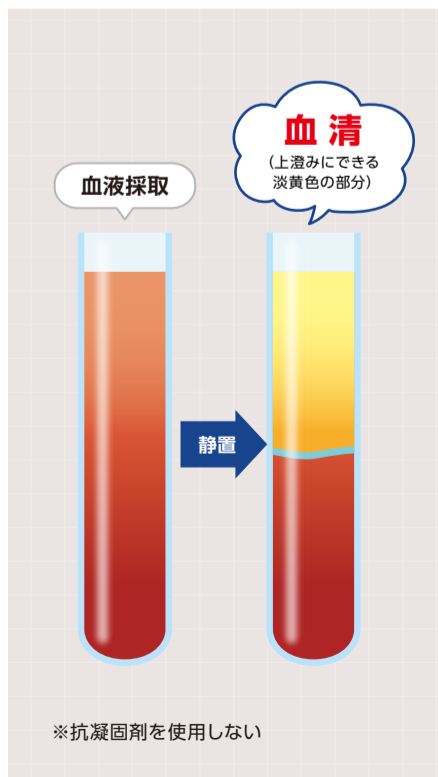


白血球にも型があった! 新しい血液「型」の発見

第二次世界大戦後、ルセラン式、ルイス式、ケル式など新しい赤血球型の発見が相次ぎ、現在では45種類の型が認定されています。一方で、白血球にも赤血球と同様に複雑な型があることが次第に解明されていきました。1952年にフランスで、血清(採取した血液を静置、もしくは遠心分離器にかけると、上澄みにできる淡黄色の液体)中に他人の白血球を凝集させる抗体(抗白血球抗体)があることから人の白血球には「型」があることが発見されました。

白血球の型は総称として**HLA型(Human Leukocyte Antigen)**と呼ばれています。日本では1985年ごろから、このHLA型の違

いから輸血後9~13日後に起こる発熱、肝障害、下痢、さらには血球減少による死亡という合併症**「GVHD(輸血後移植片対宿主病)」**が発生しました。この合併症は、輸血を受けた患者の体内で、白血球が別の型の白血球を異物(敵)とみて攻撃することから起こると言われています。日赤は、GVHDを予防するために輸血用の血液に放射線を照射し、血中のリンパ球(白血球の一種)を不活化させた血液製剤の供給を1998年から開始しました。こうして輸血用の血液製剤は安全性が高まり、献血でみなさまからいただいた血液は、さまざまな治療に役立てられています。



輸血にまつわるさまざまなエピソードを紹介する連載コーナー。今回は、「白血球型の発見」について紹介していきます。

輸血の歴史やトリビアが満載!
輸血なるほどストーリー

監修 日本輸血・細胞治療学会名誉会員
高本滋先生

vol.5

AREA NEWS

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

北海道 「医師になって患者を救いたい」 熱い思いを抱く、外科手術体験



11月5日、北見赤十字病院では「ブラック・ジャックセミナー」が開催され、39人の中学生が参加しました。このイベントは、北見市内の中学生を対象に、尊い「人の命」を救う医師の仕事の本質に触れ、1人でも多くの中学生が医師を志すきっかけとなることを願って、平成28年と令和元年に続き3回目の開催となりました(コロナ禍で3年間中断)。外科手術の研修用の人形を用いて、模擬肝臓・胆のうや模擬血管を超音波メスで手術するなどを体験した中学生は「怖かったが、1人ではなく医師同士が互いに助け合うからこそできることだと実感した」など医療に携わるやりがいを見出していました。

※本セミナーは漫画のキャラクター「ブラック・ジャック」が無免許であることなどに賛同するものではなく、「医師の仕事とは」「生命の尊さとは何か」といった作品のメッセージに共感するものです。

富山 これからは“誰でも”体験できる！ 大学祭でアマチュア無線をPR



富山県無線赤十字奉仕団は、10月28日に富山大学五福キャンパスで開催された大学祭に初出展。通信が途絶える災害時に大いに活躍するアマチュア無線の運用と赤十字奉仕団の役割をPRしました。法律改正に伴い、アマチュア無線家の監督(指揮・立ち会い)と責任のもとであれば、いつでも、どこでも、誰でも交信体験が可能に。当日は同校アマチュア無線部のスタッフとも連携しながら、マイクの使い方や交信方法を丁寧に説明し、交信サポートを行いました。初めて体験する人も、最初は戸惑いながらも真剣な表情でマイクを握り、交信できたことに感激。中には、理解度を良くするための欧文通話表や和文通話表を欲しがっている人もおり、非日常体験を楽しんでいました。

京都 19歳は京都史上最年少！ 新人救急法指導員が誕生



京都府支部に新たな赤十字救急法指導員が誕生しました。事前研修から本講習、事後研修まで、延べ8日間を費やして、見事検定に合格したのは5人。そのうちの1人、明治国際医療大学に通うボランティアの秋田光姫さんは、京都府支部史上最年少となる19歳です。検定合格後は、「最年少だと聞いたときは果たして務まるのか不安になりましたが、それを強みにして、一緒に学ぶという姿勢で挑戦しました」と語りました。今回指導を担当した赤十字救急法講師の山本隆之さんは、現役の警察官でもあり、日赤初のボランティア講師。「支部の新庁舎が11月から稼働しますが、そこが助け合いの拠点になるかは私たち次第。これからはお互いに高め合いながら頑張りましょう!」と、新人指導員に熱いメッセージを届けました。

香川 群馬 愛知 神奈川 福井

大地震や原子力災害を想定 日赤各支部で大規模訓練実施

大規模災害を想定して、この秋、全国各地で訓練が行われました。香川(1)では、9月30日に南海トラフ地震を想定した「大規模地震時医療活動訓練」を開催。県庁に設置された県保健福祉調整本部に日赤DMAT、日赤香川支部職員を派遣するとともに、香川大学医学部附属病院にはdERU(仮設

診療所)を設営し、医療救護活動を展開しました。群馬県支部(2)では、10月1日、15日の2日間、群馬県支部救護班研修を実施。県内2病院の救護班と、群馬県接骨師赤十字奉仕団員や防災ボランティアなど、約120人が参加。研修では、避難所の医療活動にかかる座学の後、巡回診療などを想定した実動訓練を実施しました。

しや児童向けの防災プログラムも実施しました。10月26日に東京・羽田空港で行われた航空機事故の対応訓練(4)には、神奈川県支部と横浜市立みなと赤十字病院から11人が参加。着陸に失敗した航空機が炎上し、多数の負傷者が発生した想定で、日赤の救護班は救護所で重症者の受け入れや診療、医療機関への搬送調整にあたりました。



愛知県支部(3)では、「地域のための防災・減災訓練」を10月21日に開催しました。4年ぶりの開催となる今回は、田原市と共催。市内の小学校と公民館を会場として、医療救護実動訓練や、地域住民自らが立ち上げを行う避難所開設訓練のほか、炊き出

しや児童向けの防災プログラムも実施しました。10月26日に東京・羽田空港で行われた航空機事故の対応訓練(4)には、神奈川県支部と横浜市立みなと赤十字病院から11人が参加。着陸に失敗した航空機が炎上し、多数の負傷者が発生した想定で、日赤の救護班は救護所で重症者の受け入れや診療、医療機関への搬送調整にあたりました。



⑥ 12月号読者アンケート 質問項目

- [A] 日赤の「会員」ですか
ア. 会員(年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く)
イ. 会員ではない
- [B] 赤十字の活動の中でよく知っている事業はどれですか
ア. 国内災害救護 イ. 国際活動 ウ. 赤十字病院
エ. 看護師等の教育 オ. 献血(血液事業)
カ. 救急法等の講習 キ. 青少年赤十字
ク. 赤十字ボランティア ク. 社会福祉
※上記選択からア～ケの文字をご記載ください。複数選択可
- [C] 今回、赤十字NEWSを読んで、赤十字の活動の中で理解が深まったのは上記ア～ケの事業のどれですか
※複数選択可
- [D] 赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま イ. A4サイズ
ウ. 小冊子(A5 148×210mm)サイズ
- [E] 現在の赤十字NEWSの読みやすさ
ア. 読みやすい イ. 読みにくい:その理由(文字量が多い/少ない、レイアウトが悪い、写真が多い/少ない、ページ数が多い/少ない)
- [F] 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 イ. 2カ月に1回 ウ. 3カ月に1回
エ. 4カ月に1回
- [G] その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望

栃木 国際理解と親善を深めるために 北関東3県のJRCが留学生と交流



9月23日、那須塩原市にあるアジア学院を茨城・群馬・栃木県の青少年赤十字(JRC)メンバー27人が訪れ、国際交流事業を実施しました。同学院は途上国の農村開発に携わる人材を養成する機関として、50年前からさまざまな国の留学生を受け入れています。JRCメンバーは農場や畜舎、コンポスト*の様子などを見学し、持続可能な農法や、命と食の大切さ、「サーバント(奉仕の精神を持った)リーダーシップ」について学びました。昼食は自分たちでカレーを作り、「手で食べる」という貴重な体験も。メンバーたちは、留学生たちに自国の状況などを聞き、海外への理解を深めました。

*生ごみなどを微生物の働きで分解・発酵させて作る堆肥のこと

埼玉 4年ぶりの「炊き出しサミット」 16奉仕団参加で大盛況



10月29日、「埼玉県赤十字奉仕団炊き出しサミット2023」が開催されました。これは、県内5つの赤十字奉仕団が集まって災害時の炊き出しを行い、奉仕団の活動をPRするもの。今年は県内外からの見学も含め、16奉仕団219人が参加しました。用意された炊き出しはけんちん汁やおにぎり、深谷市の郷土料理・煮ぼうとうなど計1100食。同時開催していた「深谷市福祉健康まつり」の来場者にも配布し、災害時用の炊飯袋に入ったご飯や汁物を受け取った来場者は「もしものときにも、温かいものが食べられたらほっとすると思います」と感心した様子。2014年に初めてこのイベントを企画し、中心となって進めてきた深谷市赤十字奉仕団の吉田弘志委員長は、「避難所でも温かく、おいしいものを提供しよう」と、深谷ならではの煮ぼうとうに挑戦しました」と振り返りました。

Present!!

献血、AED講習から、無農薬ハーブ作りまで。地域の「安心」に貢献



日赤の講師からAED使用の指導を受ける様子

福井県を拠点に、高度な「ナノめっき技術」を用いた電子部品や半導体の加工などを行う清川メッキ工業。さまざまな製品の開発を行う中で、環境を守ること、世の中に安心・安全を提供していく取り組みにも力を入れ、工業製品だけではなく、無農薬のハーブ作りやそのハーブを使用した食品の製造も展開。食品工場では高齢者・障害のある方を積極的に雇用しています。

日赤との関わりは長く、有功会や赤十字奉仕団における活動に参加し、年2回の献血車での社員による献血を20年にわたって継続しているほか、募金活動を通じての災害被災者の支援や、お年寄り・一人親世帯への支援も行っています。また、AEDの使用に関する講習を日赤の指導のもと実施。社員や地域の人々の安全を守る活動に貢献しています。

10名様 バ塩、トマトバ塩 2本セット (バ塩越前塩、バジルトマト塩)



越前の海の塩を焙煎し無農薬バジルを混ぜ込んだ「バ塩」と、ガーリックがきいた「トマトバ塩」の2本セット

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS12月号を手に入れた場所
(例/献血ルーム) ⑥12月号読者アンケートの回答(質問項目は右上の赤枠内)
※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

郵送/〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS12月号プレゼント係
WEB応募/右の2次元コードからご応募ください。
12月29日(金) 必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募は
こちらから





大洋州ってどんなところ？

太平洋の中央部に点在する島国の総称。日赤では、キリバス共和国、クック諸島、サモア独立国、ソロモン諸島、ツバル、トンガ王国、バヌアツ共和国、パラオ共和国、フィジー共和国、マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦の11カ国への支援事業に取り組んでいます。

生きる場所や資源も奪う大洋州の気候変動

大洋州と呼ばれる太平洋の島々は、サイクロンや地震、津波、火山噴火、干ばつといったさまざまな災害リスクが潜在し、近年は、気候変動の影響でさらに被害が深刻化しています。そこで暮らす人々の安全を守り、将来的なリスクに備えて行動ができるよう、日赤では、2023年4月から3年間の気候変動対策事業をスタートしました。今回は、フィジーにあるIFRC*大洋州事務所を拠点として同事業の災害リスク管理を担う辰巳 碧さんに、現地の災害対応や、今、日赤に何が求められているかを聞きました。

*国際赤十字・赤新月社連盟

**自分より困っている人へ
分け与える心
厳しい環境が育んだ共助の精神**

大洋州は、主にオーストラリア以東の太平洋に点在する14の島国を指します。その中で大洋州事務所が所管するのは私が駐在するフィジーを含めて11カ国。マーシャル諸島などサンゴ礁からなる国では、土壌が豊かではなく、高い山がないことから雲がとどまらず、降雨量が少なく、農作物もイモやバナナ、ココヤシなど生産できるものが限られます。そういった環境のためか、この地の人々は長い年月の間、助け合いながら生きてきました。**この共助の精神は、分け与えることや誰かに頼ることを意味する「ケレケレ文化」として地域に根づいています。**例えば、バスに乗るお金がなくて困っている人がいたら、手持ちのお金をあげてしまうようなことは当たり前で、自分より困っている人を助けようという思いを持った人が多いです。このような助け合いは、赤十字の精神にも通じるものですが、大洋州では支援やボランティアを行う人材が不足している現状があり、それが事業を進める上で課題にもなっています。

今回、私が担当している災害リスクマネジメント調整要員は、災害が起こったときの救援から復興に向けた長期的な支援まで、シームレスにサポートすることを目的としています。基本的には、各国の赤十字社が主

体となる活動を支える立場ではありますが、どこも職員が少ないため、支援物資の在庫やボランティアの管理など、現地の赤十字社と密接に関わりながら活動を行っています。

**自然災害と隣り合わせの日常
住む場所を失う
「気候難民」のリスク**

大洋州は、世界で気候変動の影響を大きく受ける国のランキングで、バヌアツ、ソロモン、トンガがトップ3になるなど、多くの国が上位に入っています。特にサイクロンによる被害は頻繁に起こっていて、地すべりや洪水、住宅や農地への浸水が深刻です。現地の人々はそれらの自然災害に慣れてはいるものの、対策が不十分で、その必要性を強く感じている印象です。近年は**気候変動の影響で被害が拡大し、日常会話でも、子どもから高齢者まで気候変動というキーワードを口にします。**また、気候変動による海面上昇で、数十年後には沈んでしまうかもしれないツバルのような国では、住む土地を追われ「気候難民」となる人々が増える可能性も懸念されています。これらの気候変動の影響やその後起こりうるリスクを分析すると共に、どのような対策が取れるのかを、現地の人々の視点に立って一緒に考えていくことも私たちのミッションです。その他、自然災害が発生したときには、海外からの支援がすぐに現地に届かないケースもあるため、各国赤十字社が、

行政や関係機関と協働してシミュレーションし、災害対応能力の強化に努めていくこと、さらに地域の人々に向けた防災知識の普及、ボランティアの育成といった活動にもつなげていく必要があります。

赤十字だからこそこの活動として、災害対応の初動に必要な情報を行政や各赤十字社と連携することや、支援物資や資機材の在庫の確認がスムーズに行える仕組み、また、離島やへき地でも、赤十字ボランティアによるアセスメントや救急法が実施されるなどが挙げられます。**情報収集など被災状況の把握において赤十字が果たす役割は大きいです。**6月にサモアで洪水が発生したときは、現地の赤十字のボランティアが収集した情報が、政府の公式情報として発信されました。IFRCとしても、そういった現地の赤十字を支えるべく、大規模な災害だけでなく、比較的小規模であっても迅速に資金援助ができる仕組みをつくることを検討しています。

日本の皆さんは、大洋州の国々の名前を聞くと南の楽園のようなイメージを抱くかもしれませんが、その写真や映像を彩るサンゴでできた島々で生きる人々は、実際にはとても過酷な状況に置かれています。日本も太平洋に浮かぶ同じ島国として、大洋州がどのような場所で、今、どのような支援が求められているかを、ぜひ知っていただきたいです。



辰巳 碧
(たつみ・みどり)
国際部 開発協力課

大学卒業後、開発援助機関、シンクタンク、NGOにて、主に教育と福祉分野に従事後、日赤の開発協力事業に参加。IFRC大洋州事務所にて、災害の備え・救援復興・開発協力を携わる。



IFRC大洋州事務所の職員。フィジーの海岸に漂着する海洋ごみを減らすため、定期的な清掃活動に参加



気候変動に適応したコミュニティづくりの研修。気候変動や災害、地域の脆弱性やリソースなどを学ぶ



救急法や防災教育などの青少年赤十字活動を実施している村を訪問し、子どもや若者たちにインタビュー